

森は依然、太古のままの静けさである。

一



玉砂利の声

一行はその後、バスで伊勢神宮外宮へ。緑濃い樹々の茂る参道を参進、御正殿前に到着。

御垣内に参進するとやはりそこは異空間。神域であることを感じる。

参道よりひとときわ大きい玉砂利が敷き詰められているため、ゆっくり歩く。

丁寧に足元をしっかりみつめて生きることを足裏に教えてくださっているような豊受大神の大御心を一步一步に感じる。



新御敷地

御正殿の左手奥には「新御敷地」の看板が建てられ、平成二十五年の式年遷宮にこの地に新しい社殿が建て替えられることになる。

その時を、輝きながら待っていた。

一晩目の宿、神宮会館へ。

明日の内宮での正式参拝を控え、夜は本日の直会として伊勢の味覚を有り難く味わう。

一皿一皿が豊受大神からの恩恵のように思われた。

初めて出会った旅の仲間との交流が静かに進んだ。

森は依然、太古のままの静けさである。

二



◎ 雨の内宮

二日目はあいにくの雨模様。

朝から静かな雨が降っている。

神宮の神主さんが一行を出迎えてくださっていた。

宇治橋を渡る。霧を纏う五十鈴川は晴れた日とは別の赴。

日本画のように幻想的で、美しい。

踏み締める玉砂利の音がことさら

心地好かった。



◎ 五行歌

寺社の玉砂利
あれは海の底のこと
踏みしめて
耳から
清められよう



◎ 神の声

御神木の老杉の道は六月の雨をふくんで一段と
緑の色を深めていた。

森は依然、太古のままの静けさである。

さらに進むと、その雨の中、落葉を掃いている
整備の方と擦れ違った。

このような方々の細やかな息吹によって、神宮
の美しさは守られているのだと改めて思う。

掃き集められていた落葉も色とりどりで美し
い。葉の一枚にも、神の声がする。

森は依然、太古のままの静けさである。



● 空からの禊

御正宮への石段は雨で藍色に輝き、一行は一段一段をかみ締めながら大神様の側へと参り出た。

神宮の禰宜さんのご奉仕により御垣内正式参拝。

ふとそれまで強く降っていた雨が急に弱まったのは、気のせいではない。

細やかな霧のようになった雨が、まるで空からの禊のように心身を洗い清めてくださった。

● 神の体温

この日は特別に、常には歩くことが出来ない、御正殿の回りを取り囲んでいる、四重の御垣の回りを歩かせていただいた。歩きながら、体の垣の方に面している側だけが温かく感じられたという方がおられた。

森の中では鹿が二頭、雨を凌ぐように安らいでいた。



森は依然、太古のままの静けさである。



● 神の顔

別宮、荒祭宮へと石段を進み、参拝。天照大御神の荒御魂をお祀りしている。

太古の人が神々の表情を別の神格として貴び、それぞれにお祀りしたということは、本当に素晴らしい。

その感性の細やかさこそ、この国の人の特性、財産ではないだろうか。

● お伊勢さんの旅 参加者一言集

・三十二年お姑さんを介護してきた。そのお役目を卒業したこれからは自分の時間と思い、最初の旅行に選んだのが今回の旅。ことさら感慨無量。

・はじめてのお伊勢さんが雨の参拝だったが、雨は関係ない。かえって美しく感動した

・二十年ぶりのお伊勢さん参り。お神楽は初めてでとても良かった。

・海外旅行は方々に行ったが、国内は余り行かなかった。日本にもまだまだ知らない美しいところがあると再確認。さらに旅が好きになった。

・参加者もみな良いひとばかり。やはり神仏へ向かうという目的を一つ心に持っているからだろう。